



形人動自工人



物であるにもかかわらず、生き生きとした顔に見える。その存在は、昔も今も変わらず人の心を惹きつける。伝統的には人を魅了するカラクリとして存在してきた彼らは、現代の技術を用いたロボットへと繋がっている。このロボット macra は工業的観点、デザイン、心理的観点を含めた領域「存在の美証的研究が進められた」。心を惹く「柔らかな」存在の美証的研究が進められた。



発達の観点に立った乳児研究こそが 心のメカニズムを解明する近道

開 一夫 准教授 インタビュー

駒場キャンパス3号館には可愛らしい色彩の壁紙が貼られた部屋があることをご存知だろうか。ここは、赤ちゃんの実験をする大切な研究室『あかちゃんラボ』。開准教授に、赤ちゃん学に対する熱い思いを語っていただいた。



Q ご出身は計算機科学専攻とありますが？

僕はもともと理工学部出身ですが、機械だけ研究するというのはあまり興味がなく、実は修士課程では文学部に行ったんです。文学部と言ってもいわゆる文学をやっていたわけではなく、行動科学・心理学を専攻し

ました。本当は、人間を対象とした実験をやりたいのですが、なぜか、そこでもプログラムを書いていた。感情を計算機に入れようといった大きなプロジェクトが走っていて、これは面白いと思ったのですが、やはりなかなか難しい話で、結局は「スキノ道案内システム」なんていうのを作りました。（このシステムを作ったのは20年以上前になりますが、現在みても画期的なものだと思います。）例えば「近い」という言葉は、文脈依存的に談話中で意味が決まってくるので、機械的に処理しようとしても難しいんです。その後博士課程は理工学部に戻り、通産省の電子技術研究所（現在は産総研）でもコンピューターやロボットなどの「機械」に知的な振る舞いを「学習」させる研究をしていました。

Q それがどうして赤ちゃん学になったのでしょうか？

プログラムを書いているうちに、人間は生まれて1年もすればしゃべったり、歩いたりするのに、機械はなんでこんなにたくさんプログラム書かなきゃ学習できないのだろう、機械ができないことを人間はどうやっているんだろう、そこから何かヒントを得て計算機にも応用できないだろうか、と思ったわけです。もともと僕は、人間の心理と生理、特に、小さい子どもから大きくなるまでの心の発達と脳の成長、発達といったところに興味がありました。話が飛ぶようですが、誰も自分が赤ちゃんだった時のことは思い出せません。infantile amnesia（乳幼児期健忘）と言いますが、3歳ぐらいまでのエピソードは普通の人は想起できないと言われていて、それはなにかとても不安でもあり不思議でもあるわけです。自分がどこから来てどうやって死んでいくのかって話は、哲学の問題でもあり、宗教の問題でもありますが、科学でもできるだろうと。小さな子どもの研究なくして、いつ意識は生まれるのか、いつから私は私になるのか、という問いには答えられません。大人だけを見ていると語れないわけです。

Q 研究をやっているつらいこと、楽しいことは？

赤ちゃんの実験をしている時が一番楽しいので、今、忙しくてなかなか自分で赤ちゃん実験ができないことがつらいですね。苦労という点では、赤ちゃんの実験は他の実験と違って、夜中にやるわ

けにはいかないことです。赤ちゃんに昼間にここ（駒場）まで来てもらって、しかも泣かせずに、準備した刺激を見てもらったり、頭にちょっとした測定器をつけてもらうというのは、結構難しいことです。ほかの心理学実験と違ってインストラクションもできません。でも僕は、（ちょっと自慢なのですが、）赤ちゃんに泣かれた経験ってほとんどないんですよ。

Q 著書『日曜ピアジェ』や運営するサイト「赤ちゃんラボ on the web」に込めた思いは？

赤ちゃんは理系、特に生物、機械、学習などに関心のある人から見ても驚異です。育児って言うの大変なイメージがありますが、それを超える面白さがあります。ここには普通の人でも簡単にできる赤ちゃん実験を載せました。赤ちゃんて、ただかわいいだけじゃなくて、こんなにいろんなことができるんだということを発見して、感動を味わってもらいたいと思っています。また、科学啓発というのでしょうか、今、教育産業って結構怖いんです。これをやればお宅のお子さん東大受かりますよ、みたいな有象無象な話がたくさんあります。これを判断するのは保護者ですが、判断する材料は怪しい新聞やテレビ番組ばかりです。でも、実験を、自分自身で実際にやってみれば、判断材料となる「証拠」が結構あやふやであることがわかってきます。何が科学的なのかという理系的センスを持ってもらいたいという思いも込めました。育児の方法で、今正しいと言われていたことも、新しいデータが出たりすると、ひっくり返ることがあります。変わっていくことが科学の本質であって、今、これが普通と言われていたことと、自分の子どもが多少違っていても心配することはないんだということを伝えたいのです。

実は赤ちゃん学を日本でやっている人は極めて少なく、僕みたいにバックグラウンドがコンピューターなんていう全然関係ないところから来てもできるし、やるのがたくさん残っています。そういう意味では、成熟していない学問なんです。赤ちゃん学を皆さんに知ってもらいたいですし、興味のある方にはぜひ研究に加わってほしいと思っています。

最後に、赤ちゃん研究では、何をさしおいても赤ちゃんに協力してもらおうことが必要ですから、「開は赤ちゃん募集しています」とたくさんの人に伝えてもらえるとうれしいですね。



赤ちゃんラボ on the Web

URL <http://babylab.c.u-tokyo.ac.jp/>

学際情報学府優秀修士論文発表会 学環長賞表彰式



上野景真 (田中(秀)研究室)

『Intangibles and Economic Value Creation』

1 基本的に苦勞の連続でした。インプットの側面では、締め切りぎりぎりになっても思うような結果が得られていない時の精神的プレッシャー、アウトプットの側面では、母国語以外の言語でクリアな論文を書くということに、特に苦勞しました。

2 修士課程の2年間は、論文を書くために“statistically significant” (統計的に有意)な結果を出すことが常に求められてきました。今後は、“historically significant” (歴史的に重要)な結果を残せるように、新しい事にチャレンジしていきたいと思っています。

3 i-explosionやTRONなど、最先端のプロジェクトを身近に感じながら研究を進めることが出来たこの2年間は非常に刺激的でした。今後も専攻の壁を越えて、他の研究科には出来ないようなことをとどどん進めていって欲しいと思います。

河津孝宏 (北田研究室)

『“Sex And The City”と東京の「働く女」たち:海外ドラマ・オーディエンスの文化社会学的エスノグラフィー』

1 修士論文というのは、入学以来頭から離れない大きな壁でした。そのプレッシャーは大きすぎ、この「荒行」に立ち向かう覚悟が決まらず、「社会人」を隠れ蓑にして仕事に逃げたこともありました。特に夏から秋にかけて執筆が全く進まず、精神的に辛かったのを思い出します。

2 修士論文の研究を出発点として、自身のテーマ「文化実践において人々に生きられる意味」を、社会学的かつ経験的に記述分析していく研究をさらに積み上げて行きたいと思っています。

3 学環という大学院ができ、私の経験経歴を研究資源として評価していただいたからこそ、このような研究をすることができました。これから大学の外にある知識や経験を貪欲に取り込み、それを新たなアカデミズムに接続していくメディエーターであってほしいと思います。

2月23日、優秀修士論文に選ばれた6名による論文発表会が工学部2号館93B教室で行われた。情報学環・学際情報学府にふさわしい幅広い内容の発表会となった。終了後、教員による投票の結果、学環長賞は学際理数コースの北村匡彦さんに決まり、吉見学環長より表彰状が渡された。発表をした6名から、1、論文を書くにあたっての苦勞、2、将来への抱負、3、学環へ期待すること、と題してコメントをもらった。

阿部 純 (水越研究室)

『墓と記憶—掃苔文化から見る墓の文化史—』

1 私は、掃苔<ソウタイ>という、個人的に敬慕する故人(その時代の著名人)の墓参形式を対象とし、掃苔を通して見える様々な「歴史」の形について考察しました。江戸から昭和にかけて興った趣味や教養の波、震災や戦争などもろもろの時代の諸相、それらと寄り添うようにして生き続けるものとしての掃苔を描きたかったので、膨大な資料を咀嚼することが何より大変でした。

2 博士課程では、修士論文を通して概観してきた「歴史」を土台に、現代を舞台とした都市の記憶装置のありようについて考察を深めたいと考えています。

3 刺激のかつ革新的、しかし不完全であるという意味で、か弱さのある野獣たちの集合であれたらと思います。院生の人数が多いということは、互いの顔が見えづらいという難点もありますが、それだけ互いの不足を補えるということでもあるはずです。

西田洋平 (西垣研究室)

『生命記号論における記号双対性とシステム概念』

指導教員の西垣先生はもちろんのこと、様々な方々にお世話になりました。思えば入学当初は、自分で選んだ道ではありますがそれまでと全く異なる方法論に戸惑い、また家庭の事情もあって、一時は続けることも困難に思うことがありました。実は本論文は謝辞を書く余裕もなく、もう一年あればという思いと戦いながら何とか仕上げたものです。

今回のご評価は、今後への期待という部分が大きいものと思ひ、これからの励みとして受け取るべきと感じています。研究テーマは、大きくいえば生物と情報との関係性ということになりますが、こうした研究を堂々とするのも学環・学府という特異な環境あってこそと思います。研究を通じてその発展に少しでも寄与できるように、これからも精進していく所存です。

北村匡彦 (原島・苗村研究室)

『映像の中に機械制御情報を埋め込む空間分割型可視光通信の研究』

1 本研究はDMDという面白い振る舞いをするデ

バイスを使って何かできないだろうかという所から出発しました。このテーマに辿り着くまでは、ひたすら研究室のメンバとプレストを繰り返したり、様々な分野の基礎理論を勉強したりしました。テーマ決定後もプロジェクタ作製、受信回路を設計、暗室での実験など大変なことが結構ありました。

2 普段から研究をしていて、なぜ周囲ではいい研究や技術があふれているのに、身の回りの生活に反映されていないのだろうか、という疑問を常に感じています。今後も、自分の研究が社会に還元されることを目指していこうと思います。

3 学環・学府というのは非常に恵まれた環境であったと思います。研究に理系の独りよがりな視点だけでなく、広い観点からの意見やアイデアを取り込むことができるからです。これからも、「学び」の「環」を広げて、幅広い観点から研究できる場になることを望みます。最後に、この度は名誉ある賞を頂き誠に光栄です。皆様に改めて感謝を申し上げます。



新山龍馬 (國吉研究室)

『筋骨格構造をもったスーパー・ダイナミック・ロボットの開発』

1 苦勞は、作り方のわからないロボットを創ることでした。身体運動の原理に迫るロボットとなれば、マネキンやパペットでは済まず、遊園地や映画で使われるアニマトロニクスよりも難しいわけです。従来ロボットは壊れやすく、瞬発力に欠けます。研究では、動物の仕組みをもった元気なロボットを開発しましたが、巧みな運動制御はこれからです。実世界では、モノと現象をデザインできる強い「理論」を求められるので、観念世界との接続にも苦勞します。

2 異分野の専門家や研究者ではない人達にも分かるような、様々なスケールの視点を許す、ズームに堪える学際的な研究をすること(ショート・フィルム Eames "Powers of 10" のイメージ)。

3 学際的な意見交換の仕組みを期待します。具体的には、発表の機会に、文字でコメントと評価をたくさんもらえる仕組みが欲しいです。

人事異動

着任教員自己紹介

安達裕之 教授



本年4月より流動教員として大学院総合文化研究科から情報学環に参りました安達裕之です。専門は日本造船史で、日本の船を技術、政治、経済、文化の枠組みのなかで研究しています。平成17年度から文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」（通称にんぷろ）の造船班の一人として、日中交流史における海事・造船技術について文献や遺物から実態を解明するとともに、日中の船の復原を試みて、工学的な観点から当時の船の性能を明らかにする研究に従事しておりますので、文理融合型の情報学環で研究できることを幸甚に思っております。よろしくお願いたします。

倉田博史 准教授



総合文化研究科国際社会科学専攻から参りました倉田博史と申します。統計学を専門にしております。中でも回帰分析、多変量解析で用いられる諸手法の数理的性質を中心に研究しております。最近興味を持っている手法は多次元尺度構成法と呼ばれるもので、主に心理学で用いられるものです。この手法は、実験などによって複数個の刺激間の類似性（相互距離）が得られているときに、これを適当な次元の空間内の点配置で表現する、というものです。私は相互距離を要素に持つ行列（ユークリッド距離行列）の性質を調べているのですが、その過程でこの概念が情報科学の分野で非常に詳しく研究されていることを知りました。このたびタイミング良く情報学環で研究・教育する機会を頂きましたことを大変嬉しく思っております。何卒よろしくお願致します。

岡田猛 准教授



専門は認知心理学・認知科学です。研究テーマは科学的発見や芸術創作などの「創造的認知」の解明で、フィールド観察やインタビュー、心理実験などを組み合わせる「マルチメソッド」を用いて研究を進めています。その際、社会的スケールの異なる活動（例えば、個人の認知、コミュニティの合意形成、社会からの圧力など）の相互作用、および、時間的スケールの異なる活動（例えば、作品のアイデアのひらめき、作品シリーズのコンセプトの形成、創作ビジョンの明確化など）の相互作用として、創造プロセスを捉えようと考えています。情報学環では、他分野の研究者の皆さんの刺激を受けながら、創造的認知プロセスのモデル化に向けて、研究を進めていきたいと思っています。

教員

採用

- 1/1 七文直弘 助教授
- 4/1 石川雄章 特任教授
- 4/1 下畑光夫 客員准教授
- 4/1 北村 智 客員教員

昇任

- 3/1 佐倉 統 教授

配置換（転入）

- 4/1 安達裕之 教授
(大学院総合文化研究科から)
- 4/1 倉田博史 准教授
(大学院総合文化研究科から)
- 4/1 岡田 猛 准教授
(大学院教育学研究科から)

配置換（転出）

- 4/1 佐々木正人 教授
(大学院教育学研究科へ)
- 4/1 山口 泰 教授
(大学院総合文化研究科へ)
- 4/1 安富 歩 准教授
(東洋文化研究所へ)

辞職

- 3/31 関谷直也 助手
(東洋大学社会学部講師へ)

任期満了

- 3/31 清原聖子 特任助手

職員

定年退職

- 3/31 柿沼弘子 図書係長
- 3/31 西川光江 一般職員

ソウル大言論情報学科の授業を 学府で受講できるようになります

学際情報学府では、今年度より、ソウル大の授業をビデオ会議システムを通して受講できるシステムをスタートさせます。初年度は冬学期に、ソウル大言論情報学科姜明求教授による「東アジアのメディア研究」を開講します。もちろん、この授業で単位取得もできます。また、ソウル大側は姜尚中教授の授業を、ビデオ会議システムを通して受講できるよう計画中です。今後も、こうして両校の教育・学術交流を深めていきたいと考えています。詳しくは学務係からのお知らせをご覧ください。

国際活動委員会・教務委員会より(林香里)



情報学環教育部修了式

3月14日、情報学環本館2階教室で教育部修了式が行われた。新聞研究所の設置とともにスタートした歴史ある教育部の修了式である。今年度修了者は19名。今年も明るい笑顔が揃った。

コンテンツ教育プログラム修了証書授与式

コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムの修了式が、3月17日に工学部2号館93B教室で行われた。昨年度に続き第2回の修了式となり、修了生は26名であった。式には同プログラムの特任教員でもある(株)プロダクション・アイジーの石川光久氏、(株)モバイル&ゲームスタジオの遠藤雅伸氏、(株)GDHの公野勉氏らが列席し、修了生に祝辞を述べた。



学際情報学府学位記授与式

3月22日、平成18年度学際情報学府の学位記授与式が、工学部2号館93B教室で行われた。吉見学府長より博士課程修了者6名、修士課程修了者59名の一人ひとりに学位記が渡された。

シンポジウム

「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館一連携に果たす大学の役割」



2月17日、シンポジウム「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館一連携に果たす大学の役割」(共催:教育学研究科・人文社会系研究科・情報学環)が弥生講堂(一条ホール)において開催された。

人文社会系研究科から早乙女雅博教授、情報学環からは馬場章教授、史料編纂所からは石川徹也特任教授が登場して各自の研究成果をもとに知の諸制度と大学の役割について論じ、次いでパネリストとして登壇した根本彰教授(教育学研究科)、木下直之教授・佐藤健二教授(人文社会系研究科)より、図書館情報学・文化資源学・博物館学の専門的見地からの議論が提起された。会場にはほぼ満席となる約200人が詰めかけるなど関心も高く、参加者も活発な応答が行われたほか、講堂内で行われたデジタルアーカイブのデモンストレーションも好評を博した。(研究拠点形成特任助手・添野勉)

大井町プロジェクト「一日東大生」

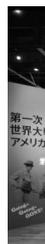


昨年12月22日、地域振興と地域の教育力向上を目指す「大井町プロジェクト」(代表:馬場章教授)の一環として、品川区立立会小学校の六年生児童と保護者、地元大井銀座商店街の関係者計約70名が「一日東大生」として、昨年度に続いて東京大学を訪れた。

午前中は工学部新二号館で吉田正

高特任講師から、「歴史と文化を学ぶことの意味」と題して歴史学とコンテンツビジネスをテーマとして学ぶことの原点を考える特別講義が行われ、児童のみならず保護者からも好評を得た。午後は馬場研究室の教員や大学院生の案内で総合研究博物館をはじめとした本郷キャンパス構内を見学、さらに情報理工学系研究科の苗村健助教授の研究室で最先端のインターフェース技術などのデモを見学するなど、貴重な体験学習の場を提供した。(研究拠点形成特任助手・添野勉)

展覧会『モード・オブ・ザ・ウォー 東京大学大学院情報学環所蔵 第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスター コレクションより』



情報学環、凸版印刷・印刷博物館との共催で、展覧会「モード・オブ・ザ・ウォー」が開催された。学環コレクションからアメリカのものを中心に124点を展示。広く一般公開するのはこれが初めてで、吉見研究室によるデジタル・アーカイブ化の際に行われた、印刷に関する共同調査を契機に実現した。戦費調達や兵士募集のために発行されたプロパガンダ・ポスターが、戦争と人々の意識との間でどのような役割を果たしたかを、「社会」、「イメージ」、「技術」の3つの視点から考察。当時の社会背景、戦時体制の構築、アメリカの戦争に対するイメージの原型、アーティストや使用された印刷技術などを紹介し、各方面から関心を集め、好評を博した。(小泉智佐子・技術補佐員)

春休み学環百人一首大会

3月23日、工学部2号館9階で学環百人一首大会を開催しました。当日は様々なコースの学生や先生、学務の方など30名余りが参加し、学環生活での思いや研究について短歌を詠み、歌留多を作りました。その後、作成したかるたを使って遊びましたが、ここでは、先生達も童心に返り白熱した闘いが繰り広げられました!

本大会は普段ばらばらな場所でそれぞれの研究を行っている学生が、異分野、異コース、異研究室を超えてコミュニケーションするプログラムと場を作ることを目的にKARUTAチーム(メディア表現論内)が企画したものです。

大会後のアンケートではこういった場やプログラムの継続的な実施が必要というご意見も多く、現在、オンラインとオフライン両方で学環内のコミュニケーションのため、また福武ホール盛り上げ企画としてアイデアを練り始めた所です。興味のある方はお気軽にご連絡ください。今回の大会にご協力頂きました皆様本当にありがとうございました。(水越研M1・石田万梨奈)

当日の様子はこちらから
<http://www.geocities.jp/karutaws/main.html>



UBIQUITOUS MEDIA:ASIAN TRANSFORMATIONS 開催

大学院総合文化研究科、ノッティンガム・トレント大学との共催で、堀場国際会議「ユビキタスマディア: アジアからのパラダイム創成」を開催いたします。メディア理論家F・キットラー氏と本学元総長の蓮實重彦氏の討議をはじめ、レム・コールハース氏、ベルナル・スティグレル氏、浅田彰氏(京都大学)らによる基調講演を通して、新しいメディア理論のパラダイム革新をめざします。テーマに関連した約54の個別パネルもあり、こちらでの一般発

表を募集しています。学際情報学府のみなさんも、奮ってご参加下さい。

会期: 2007年7月13日(金)~16日(月・祝)

場所: 東京大学 本郷キャンパス(安田講堂、工学部2号館)

詳細は、<http://www.u-mat.org/>でご確認下さい。

台湾大学新聞研究所所長 来訪: 国際ワークショップ「アジアのメディア産業における『産学協同教育』の現状と未来」にて



さる1月29日ジャーナリズムおよびコンテンツ分野における産学協同教育についてのワークショップが開催された。ゲストには、国立台湾大学新聞研究所彭文正所長を招き、米国におけるコロンビア大学のジャーナリズム・スクールから範をとった同研究所の実務教育の内容を紹介してもらった。彭所長は、マスメディアの問題点を指摘したうえで台湾におけるジャーナリズム教育の必要性を強調しながら、同研究所の大学内、そして産業界との連携において演じる重要な役割を報告した。最後に、今日のデジタル化、専門化、そしてグローバル化の潮流の中で、ジャーナリズム教育が一層重要になるという展望が示された。続いて、馬場章教授と藤原正仁特任研究員から、コンテンツ分野における産学連携教育について、日・台比較の視点からの分析が行われ、日本の業界の様々な問題が指摘された。総合討論では、学生からの意見も交えて活発な議論を果たせた。(林研D3・林怡媛)

受賞報告

須藤修研究室M1の梁成杰が第59回学生広告論文電通賞第5部佳作賞を受賞した。論文タイトルは「地球環境問題と広告——環境問題に関わるイノベーションと環境問題に関する広告の新しいかたちについて」。表彰式は3月28日に行われた。

BOOK

『戦争の表象 東京大学大学院情報学環所蔵 第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスター コレクション』

東京大学出版会 吉見俊哉 編



情報学環(旧新聞研究所)所蔵の第一次大戦期プロパガンダ・ポスターコレクション約660点の全ての図版(カラー)とテキストデータを掲載。アメリカなど6カ国のもので、印刷に関する詳細データも収録している。



『対等な夫婦は幸せか』

勁草書房 双書ジェンダー分析13
永井 暁子・松田 茂樹 編

共働きが多数を占めるようになってきた現在、夫婦関係はどう変わるのか。結婚、離婚、家計、働き方、政治参加から、これからの夫婦が直面する課題を提示する。各章執筆者は順に、松田茂樹、中村真由美、三輪哲、水落正明、裴智恵、竹内真純、前田幸男、松田茂樹、永井暁子。

学環学府 Number. 17

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of the University of Tokyo

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行: 2007年4月 編集委員: 深代千之・林香里・吉海智晃・前波奈保子

e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

今号の
表紙

画像提供は稲葉研究室、同研究室学府学生により設計、行動学習研究が進められています。2005ヒューマノイドロボット・デザイン・コンテスト メカニカル部門大賞受賞。 <http://www.jsk.t.u-tokyo.ac.jp/>
かわら版は情報学環所蔵小野秀雄コレクションより かわら版13. 世相風刺No.4「英国女王写真鏡」